

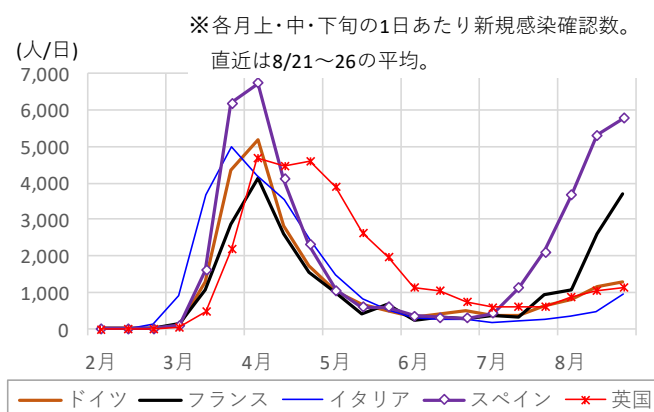
欧州経済：コロナ感染の再拡大が回復の重石に（改訂見通し）

4～6月期の実質GDP成長率は、ユーロ圏で前期比年率▲40%、英国で▲60%と極度の落ち込み。7～9月期以降の欧州経済は、行動制限や営業停止措置の解除を受けてリバウンドしていく見込み。ただし、スペイン・フランスで感染第2波が発生し、独・英・伊でも追従する可能性が出てきていることは、市民の外出意欲や支出マインドを再び慎重化させる要因となろう。また、世界のコロナ感染状況や景気悪化の状況を踏まえると、訪欧者数や輸出の急回復も期待し難い。従って、今後の持ち直しペースは、ユーロ圏、英国ともに当初（4月時点）の予想よりも緩慢になる可能性が高い。ユーロ圏の成長率は2020年▲9.3%、2021年7.0%と予想。英国は2020年に▲12.0%まで落ち込む後、2021年には9.0%となる見通し。

コロナショックの現状：スペインとフランスで第2波発生、独・英・伊の感染者も緩やかに増加

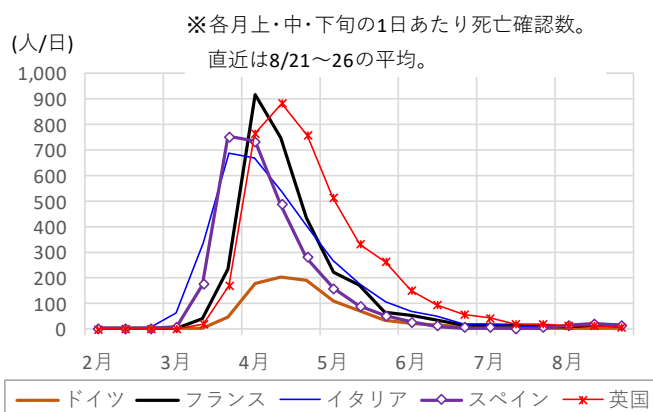
- ▶ 欧州主要国での新型コロナウイルス新規感染者数は、スペインで7月中旬以降、フランスで7月下旬以降再び増加しており、両国は「感染第2波」の様相。また、ドイツと英国も8月上旬以降緩やかに増加し、8月下旬にはイタリアも増加。独・英・伊でも「第2波発生」の懸念が高まりつつある。8/21～26の1日あたり人数は、スペイン5,760人、フランス3,678人、ドイツ1,301人、英国1,117人、イタリア983人。
- ▶ ただし、死者数については、各国とも8月下旬にかけて低水準に抑え込めており、この点は今年3～4月の第1波発生時とは状況が大きく異なる（8/21～26の1日あたり人数：スペイン15人、フランス13人、ドイツ5人、英国9人、イタリア6人）。各国で、感染状況を正確に把握するための検査体制の拡充、および第1波の経験に基づいた治療体制の整備が進んでいることが窺える。

新型コロナウイルスの新規感染者数



(出所) CEIC (データ元はWHO)

新型コロナウイルス感染による死者数



(出所) CEIC (データ元はWHO)

- ▶ そうした中、各国は、感染抑制策についても第1波への対応時とは異なる方針を打ち出している。すなわち、全国一斉に外出・営業を制限するのではなく、感染拡大地域や業種（例えば「夜の街」など）に限定して措置を講じるようになっている。例えば、ドイツでは、人口10万人あたりの新規感染者が50人を超

えた都市や郡を個別に封鎖することになっている。

- ▶ また、入国制限についても機動的な対応が見られる。英国は、7/25よりスペインから、8/15よりフランスからの入国者を2週間の自主隔離義務の対象に加えた。ドイツも、8/14からスペインからの入国者にPCR検査を義務付けている。
- ▶ このように、欧州主要国では、小規模な制限措置を機動的に講じて感染抑制を図りつつ、経済正常化に向けた取り組みを極力妨げないようにするスタンスが定着しつつある。そうした中で、欧州経済は当面リバウンド局面が続くと考えられるものの、新規感染者が再び増えているという事実はやはり、市民の移動を躊躇させ、景気回復のペースを鈍らせる要因となる。

経済指標：夏場は家計のペントアップ需要が盛り上がる一方、生産活動の記録的低水準が続く

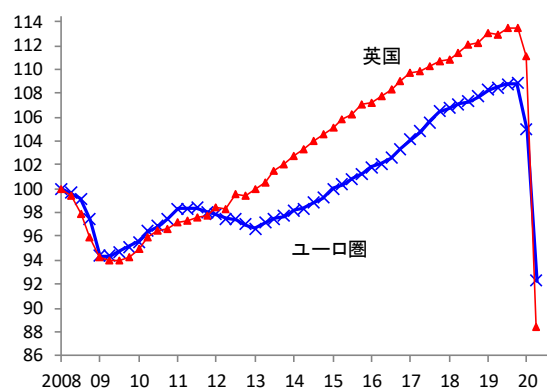
- ▶ 4～6月期の実質GDP成長率（速報値）は、ユーロ圏全体で前期比▲12.1%（年率換算▲40.3%）と、マイナス幅が1～3月期の▲3.6%（年率▲13.6%）から大きく拡大。国別の成長率も、ドイツ（1～3月期前期比▲2.0%→4～6月期▲9.7%）、フランス（▲5.9%→▲13.8%）、イタリア（▲5.4%→▲12.4%）やスペイン（▲5.2%→▲18.5%）と、いずれも記録的なマイナスに。また、英国の成長率は前期比▲20.4%（年率換算▲59.8%）¹と、行動制限の緩和の遅れを反映してユーロ圏各国よりも大幅な落ち込みに。
- ▶ その後の7月分の経済指標は一部しか公表されていないが（外食は8月分あり）、行動制限が概ね解除された中で、家計のペントアップ需要が顕在化している様子を示唆。一方、鉱工業の設備稼働率はユーロ圏・英国ともに底打ちしたが、戻り幅は限られ、特に英国の弱さが顕著である。

*英国の小売売上高（数量ベース、自動車を除く）

… 4月をボトムとして、5月から7月にかけて3ヵ月連続の増加。7月の前月比伸び率は3.6%と、5月の12.3%、6月の14.0%からは鈍化したが、水準は4～6月平均を16.8%、2019年平均を2.5%も上回って既往最高に。業態別には、食料品店の売上増が一服する一方、家電やガーデニング関連をはじめとした非食品系が全体を牽引。なお、ユーロ圏の7月分は未公表。

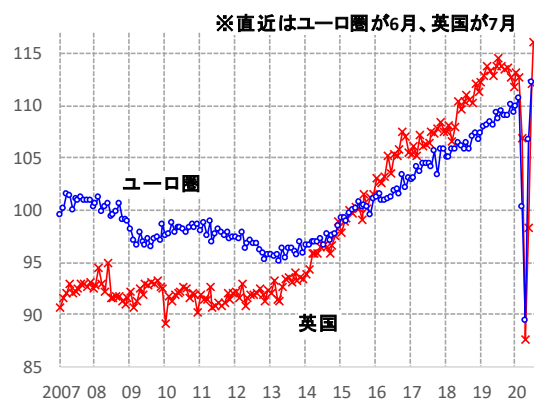
- * ドイツと英国のレストラン来客数（着席飲食件数、予約サイトOpentableの集計）… 独・英ともに3月下旬からゼロの状況に陥ったが、飲食店の営業が解禁されたドイツの来客数は5月中旬から持ち直し、7月後半以降は前年超えの状態が続くほどまでに回復。英国も、7月初の飲食店営業解禁を受けて持ち

ユーロ圏と英国の実質GDP（2008年1～3月期=100）



(出所) CEIC

ユーロ圏と英国の小売売上高
(数量ベース、自動車を除く、季節調整値、2015年=100)



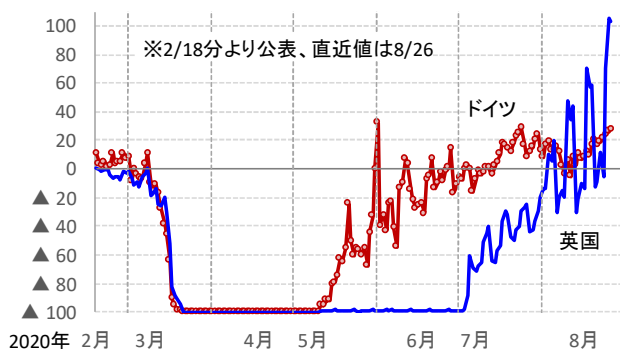
(出所) CEIC Data

¹ 英国の1～3月期成長率は前期比▲2.2%（年率換算▲8.5%）であった。

直し始め、8月は前年同期を大幅に上回る日が頻出。

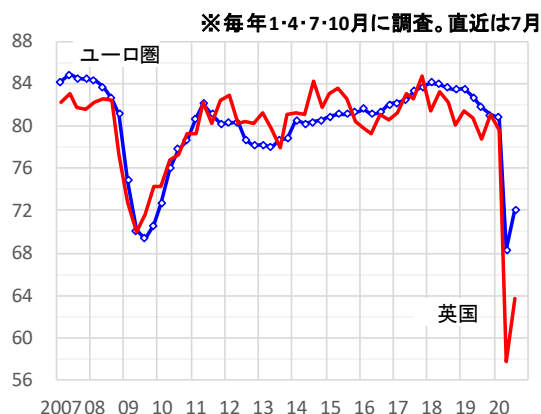
＊**鉱工業の設備稼働率** … ユーロ圏では、1月（コロナ前）の80.8%から4月には68.3%へと落ち込んだ後、7月には72.1%へと持ち直し。もともと、概ね世界金融危機直後の2009年と同程度の稼働状況にとどまっている。英国では、1月の79.6%から4月には57.7%まで急低下。7月は63.8%へと上昇したものの、依然として世界金融危機時のボトム（2009年4月70.0%）を大きく下回る。

ドイツと英国のレストラン来客数（Daily、前年同期比、%）



（出所）OpenTable（レストラン予約サイト）
（注）前年の同じ週の同じ曜日と比較した、着席飲食件数の変化率。

鉱工業の設備稼働率（季節調整値、%）



（出所）欧州委員会

成長率見通しの改訂（下方修正）：2020年はユーロ圏▲9.3%、英国▲12.0%

- 欧州経済は、各国の行動制限が概ね解除された中で今後、ユーロ圏、英国ともに持ち直していく見通し。特に7～9月期の個人消費は、ペントアップ需要の盛り上がりから急増する可能性が高い。
- ただし、スペインとフランスで感染第2波が既に発生し、ドイツ・イタリア・英国などでも今後追随する可能性が出てきたことは、死亡者数が第1波の時よりも大幅に抑えられているとは言え、市民の外出意欲や支出マインドを再び慎重化させると見られる。そのため、ペントアップ需要一巡後の個人消費の回復ペースは緩慢となる見込み。
- また、世界のコロナ感染状況や景気悪化の状況を踏まえると、訪欧者数や輸出の急回復も期待し難い（鉱工業稼働率の低迷持続と整合的）。
- 以上より、景気の持ち直しペースは、ユーロ圏、英国ともに当初（今年4月）の予想よりも緩慢となる見込み。また、4～6月期のマイナス幅が当初見込みより大きかったこともあり、実質GDPがコロナショック前の水準に戻る時期も2022年入り後へ後ズレすることに（当初予想は2021年夏場）。

ユーロ圏の成長率予想

	2017	2018	2019	2020	2021
%、%Pt	実績	実績	実績	予想	予想
実質GDP	2.6	1.9	1.3	▲9.3	7.0
個人消費	1.7	1.4	1.3	▲7.0	6.0
固定資産投資	3.8	3.0	5.7	▲8.5	4.8
在庫投資（寄与度）	(0.2)	(0.0)	(▲0.3)	(▲1.4)	(1.0)
政府消費	1.3	1.2	1.8	2.0	4.8
純輸出（寄与度）	(0.4)	(0.2)	(▲0.5)	(▲2.8)	(0.6)
輸出	5.5	3.6	2.5	▲16.0	10.0
輸入	5.1	3.6	4.0	▲11.2	8.8

（出所）Eurostat

- ユーロ圏の2020年成長率は▲9.3%、2021年は7.0%と予想（4月時点の▲7.0%・7.6%から下方修正）。また、英国の成長率は、2020年に▲12.0%まで落ち込む後、2021年には9.0%となる見通し。